

# HELLCAT

士郎正宗

SHIROW MASAMUNE

GALGHESE DDS  
HELLCAT

何時だったか思い出せないが、私が初めてジョー（ジョアン）を見たのは、西黒森の狼狩りの時だ。式典に参加せず、エサに使う鳥達をバラバラにしてドレスを赤黒く血染めていた印象だけが残っている。楽しそうに死体を並べていたな……  
彼女の侍女8人が続けて変死体で発見されたり、茹でたミミズみたいな（実際にやってみた事は無いがそんな印象の）牛くらいある大きなものが村人を13人殺して消えた時も、頭と思しき部分に彼女の顔状の突起があったと噂になった。今の私にはそれが何で、どう使役するか、誰が何時召喚したかも分かる。ジョーは人間の姿をしているが、忌み避けるか殺すべき魔女だ。



SHIROW MASAMUNE

2003.11.07-2





Joan of Darkness





人間世界に存在する魔導書のほとんどは「後世の信者による解釈」が加えられて信頼に値しない危険な物になっているから、うかつに実行してはならない。詳しい事は分からないが、ジョアン・ネルギウスは「不死の秘法」や「永遠の若さ」「夢の王子様」を求めて「レメゲルトニア」や「ゲマトリアレクス」といった怪しげな書籍を研究していたらしい。ある時、召喚した魔物が捧げ物に満足しなかったのか術者が未熟だったせい（おそらく両方だな）、結界を破ったのだそうだ。ジョー（ジョアン）はドレスを引き裂かれ、護衛士達が為す術もなく見守る中、魔法円から次々と湧いてくる魔物共に何日間も激しく魔導され続けたと、その場にいた護衛士の死霊が言っていた。魔物達は、死霊が赤面して口をはばかりな言葉を吐き合いながら、盡く症状突起の生えたオオウツボみたいな触腕

を狂った様にのたくらせてジョーのまだ幼い肉体を食っていたが、ジョーが何かした故か手続きが済んだ故か分からないが、彼女を魔法円の門から異世界に連れ去ってしまったそうだ。魔法円や呪文に関する断片証言からその魔物は古代の邪神クロモニヒムニモスの一族である事が分かったが、司書が非協力的なものと海洋資源の減少で、接触・制御法を把握するまで随分かった。「深海録」に記載してあるクロモニの図版には、傍らに「顔に類がれクロモニの部下達に玩弄される人間の少女」が描かれており、これがどうもジョーそっくりに見えるのだ。何かに仕向けられている様にも感じたが、私は非常用の魔導装置にも張り巡らせてクロモニと接触してみる事にした。勿論、もしジョーの苦痛が充分でなければ「事態を改善」するつもりで、だ。





異界の求道者クロモニヒムニモスを召喚すると予想通りジョー（実際の姿は分からないが、見た目は私が遠い昔見かけたまま）と交わった状態で現れた。クロモニはどうやら奴の世界とこの世界を繋ぐ方法を模索し続けているらしい（繋がり方は完全に間違っている様に思うが奴の思考は理解不能だ）。初動手続きも終わらない内にジョーの知識を使ってか、私が仕掛けた最初の魔方陣を見事な手際で解除した。物理特性をこの世界に合わせて拘束した状態を保っていたから何とか対処できたが、ルールが違う相手と対峙するのは困難だ。クロモニはジョーを手放したくないらしく交渉は決裂、随分と長い間戦っていた様に思う。巨大台風が3つ発生したくらい海が荒れた激しい魔法則戦だった。何のきっかけだったか忘れたが船底から半魚人達の一部が流出し、クロモニはそれらを吸収しジョーを放して去っていった。クロモニから離れたジョーはその場で溶けて無くなってしまった（時間帳尻が合ったのだろう）。かくして私の復讐は遂げられ「幽霊船での日常」と向き合う時が来た。















*Christabel P. Athamastus*



鳥達が居かしいある日、最初のメッセンジャーが船に現れた。明らかに二本足で直立歩行する事に慣れていない様子で小刻みに震えながら不思議な声で喋る人型の「それ」は、深海で眠っている古代の神々の胎腕の先端部が変形したものだ。「死の貴婦人」の翻訳によると（これもどの程度信頼して良いものやら）深海で眠っている古代の神々がクロモニムニモスの不快な来訪を受けたのは、この船がクロモニに「船底のもの達」を惹き異世界の門が開いたからだと思ひ込み、ひとりで悩んでいると云うのだ。可憐な航海日誌を見ると、いつの間にかいなくなったリベリウスがクロモニに「船底のもの達」を渡し、代わりに何かを得て、どこかへ飛んで行ってしまったと記載してある。まったく迷惑な話だ。元々、深海で眠る古代の神々は天界の神々や浅海の私達が邪魔で地上に出る事ができないらしい。特にすぐ頭上にいる私などはまさに直近の敵というわけだ。怒っているというのはジェスチャーで、単に交渉の材料が手に入ったという事なのだろうが……



*Errand of Abyssal Dominatrix*



*Christabel P. Athamastus*





Christabel P. Arhamastus

事はネルギウスの思惑通りに運ばなかった。何の前触れも無く、颯り場一帯に生暖かく濃い霧が立ちこめたかと思うと、金属の擦れ合う重苦しい音と骨肉の引き裂かれる響き、男達のこの上なくおぞましい悲鳴があたりを埋め尽くした。視界が悪いせいで分からなかったが、私は本能的に海で消息を絶っていた父と兄が戻ったのだと感じた。凄まじい一撃が私と架台を繋いでいた鉄の鎖を断ち切り、材木の倒れてくる音が聞こえたのを最速に、何かが後頭部に当たり私は気を失った。父に抱き抱えられて空を舞う鳥達を見たような気もするがはっきりと思い出せない。ともかく我が一族の血と私の貞節はからうじて守られ、次に目覚めたときは

大海原の中、大きな船の壁えられたベッドで身体を横たえていたのだ。生きたものの気配が全く無いこの不気味な船は、別の船を見つけると音も無く接近し（見境は無いようだ）、それまで何もなかった柱の影や船倉から現れた無数の兵士（いずれも海で死んだ者らしい。隙間なく補充されるので数は分からない）で襲撃し船を沈め、妙な「祈り」らしきものを何かに捧げている。いつ頃から気付いたのだったか、この連中は私の命令を聞かない。血を好み、襲撃や殺戮をやめさせる類の命令は無視するが、そうでなければ文字通り何でも言うことを聞く。そんな生活に慣れた頃、夢枕に父と兄が立つようになった。